

## ディケンズのことばの遊び

吉田孝夫

### The Word-play of Dickens

Takao YOSHIDA

文豪は偉大な言語の芸術家でもある。ディケンズ文学の真髄はユーモアで、その主流は彼のことば遊びにある。ことば遊びには安易なしゃれもあれば、比較的知的訓練を要する縁語、もじりもある。本論はディケンズのことばの遊びを、1.しゃれ、2.類音、3.縁語、4.もじり、5.慣用句の解体と慣用句と普通の言い方の組み合わせ、6.誇張表現の観点から、実例を文脈をたどりながら解説し、考察する。本論の引用は *Martin Chuzzlewit* (1844) で例文の後に章を記した。引用の所々に彼のほかの作品からとったものもあるが、その箇所にはそれらの作品名を示した。本文中の引用例はすべて *The Oxford Illustrated Dickens* (Oxford University Press) に拠る。

1

しゃれ (Pun) は同一の語、同音または類音を異なった意味で用いることばの遊戯で、ことば遊びの中で最も多用される。「俺には50人の質屋 (uncles) を買い占めることが出来る叔父 (uncle) がいるんだ」とスライムは笑って言った (ch. 7)。uncle は ((英俗)) で「質屋」の意味がある。チャリティ嬢が、「父親の指図 (directions) に従いましたわ」と言うと、彼女のいとこのジョーナスは、「彼はあて名 (direction) を教えてくれたらよかったのに。そうすれば、もっと早く君を見つけることが出

来たのに」と応じた (ch. 11)。火酒 (spirits) がどんなによいものであろうと、また、鬼の洞穴で見た妖精 (spirits) と同じように標準強度を越えていても (妖精の気質・行動が過激であることを示す)、クリスマスの時に人が不機嫌になり、ひとりで酒を飲んでいると、それで少しも益がないと覚悟したほうがよい (*The Pickwick Papers*, 29)。「これは」とベックスニフは、ぶどう酒ではなく、ここに会した一行にふれて言った。「多くの失望や腹立ちに対してつぐないをしてくれる親しい交わり [混合酒] (Mingling)。愉快にやりましょう」 (ch. 5)。しかし、これは事実 (fact) の問題です。そして本当は (the fact)、こおろぎがその存在の兆候をあらわすより、少なくとも5分前にやかんがそれ [歌] を始めたのです (*The Cricket on the Hearth*, 1)。ドアの真鍮板には「建築家、ベックスニフ」と書いてあり、商売用の名刺では、「土地測量技師」(LAND SURVEYOR) と付け加えてあった。ある意味ではかなり大規模な土地観察者だったと言ってよい。広々した風景 [土地] が家の窓の前に広がっていたからである。

The brazen plate upon the door (which being Mr. Pecksniff's, could not lie) bore this inscription, 'PECKSNIFF, ARCHITECT,' to which Mr. Pecksniff, on his cards of business, added, 'AND LAND SURVEYOR.' In one sense, and only one, he may be said to have been a

Land Surveyor on a pretty large scale, as an extensive prospect lay stretched out before the windows of his house. (ch. 2)

次例は turn が「性質」と「才能」の意で用いられた。

There was a gentleman of a vocal turn, and a gentleman of a smoking turn, and a gentleman of a convivial turn; some of the gentlemen had a turn for whist, and a large proportion of the gentlemen had a strong turn for billiards and betting. (ch. 9)

道銭とり立て人とその妻は、どうしてトム・ピンチがベックスニフのもとをとび出したのか、いくら考えても見当がつかず、暗闇の中で〔何も分らないで〕(in the dark)、床についた (ch. 31)。歌の折りかえしはやはり (still) 同じで、こおろぎとやかんはますます高く高く高く (louder, louder, louder still) 声をはりあった (*The Cricket on the Hearth*, 1)。自分の娘を託した男〔ジョーナス〕、もしその男が人生の不毛の荒野の緑の一点 (a green spot) でなかったら、あのオアシスはどこで見つけたらよいのだろう、とベックスニフは思った。その瞬間に、自分がどんなに緑の〔だまされやすい〕一点 (a very green spot) に足を踏み入れたかを、彼は夢にも思っていなかった! 「すべては塵 (dust) にすぎない! 」と言った時、どんなに早く自分の金 (dust) を出すようになろうとは、予想もしなかった。

If the chosen husband of his daughter, the man to whom he had delivered her with so much pride and hope, such bounding and beaming joy: if he were not a green spot in the barren waste of life, where was that Oasis to be found?

Little did Mr. Pecksniff think on what a very green spot he planted one foot at that moment! Little did he foresee when he said, 'All is but dust!' how very shortly he would come down with his own! (ch. 44)

真鍮と銅の鑄造師の「世間でよくあることばだ! (The common cant!)」を受けて、トムは、「低俗な心の話です (the story of a common mind)」で応じる (ch. 36)。抜け目のない (smart)

市民は金持ちになり、友のない犠牲者たちは悲嘆に暮れ (smart)、死亡し、忘れられる (ch. 33)。ティッグはより大規模な (on a grander scale) 投機をして、もっと堂々たる人物 (a grander man) になった (ch. 27)。「私のポケットはそうとう窮屈〔けち〕(tight) でね」とジョブリングは言った (ch. 41)。

少なくともあるひとりのチャズルウィットがウィリアム征服王と一緒にイギリスに渡来した (came over) ことは疑いの余地がない。その後のどんな時代にも、この輝かしい祖先が、その君主を裏切った ('came over') とは考えられない。この一族は大きな地所を持っていたとは思われないからである。

There can be no doubt that at least one Chuzzlewit came over with William the Conqueror. It does not appear that this illustrious ancestor 'came over' that monarch, to employ the vulgar phrase, at any subsequent period: inasmuch as the Family do not seem to have been ever greatly distinguished by the possession of landed estate. (ch. 1)

モッドルは羊飼いの使命は羊の群れに笛を吹くこと (to pipe to his flocks)、水夫長の使命は水夫全員に笛で命令すること (to pipe all hands)、ある男の使命は支払いを受ける笛吹きになること (to be a paid piper)、べつの男の使命は笛吹きに支払いをする〔(娯楽などの) 費用を持つ〕こと (to pay the piper) と心得て、自分自身の特別の使命は目に涙の管を取りつけること (to pipe his eye) と思いこんでいた (ch. 32)。「奴〔ジンキンズ〕はカミソリのことでほら口をたたき、週に1度以上ひげをそる (shave) 必要のない連中に罵声を浴びせるのか。奴はいずれ間もなく、ひげを短くそられる〔すっかり出し抜かれる〕ことになるだろう (He'll find himself shaved, pretty close)」と一番若い紳士は言った (ch. 10)。「やかんがたぎったら、次の水薬を飲ませてあげますよ。それから、さわってあげますよ (you'll be touched)。もし薬を静かに飲まなかったら、たたきのめしますよ (You'll be touched up)」とギャンプ夫人は患者に落ちついてやりかえした (ch. 25)。ピンチはだれにも絶対に責任を

負っていない任務を解雇され (is discharged)、ベックスニフは社会に負っている任務を遂行する (discharges) (ch. 31)。うろたえてアントニーとその息子から別れ (Taking a confused leave of Anthony and his son)、自分と娘たちの荷物を事務所にあずけて (leaving the luggage of himself and daughters at the office)、あとで取りに来ると伝えて、ベックスニフは若い婦人をそれぞれ左右の腕に抱きかかえるようにして、すっかり取り乱したように街路をくぐり抜けた (ch. 8)。ベックスニフはきちんと問題に栓をした (corked the subject) ような態度で、しっかりびんに栓をした (corked the bottle) (*Ibid.*)。青竜旅館を去るマーク・タップリーに、その女主人のルーピン夫人は給料を手渡して、「何を飲む (take) の？」と尋ねる。まるぼちゃで、明眸の、えくぼのある魅力的な宿屋の女主人に抗しきれず、彼は自制心をかなぐりすて、彼女の腰に手を回して、「一番好きなものをとるとしたら、あなたをとり (take) たい」と言う (ch. 7)。トジャーズ夫人が、「ジンキンズがいつもこの家で指導者になっています (takes the lead in the house)」と言うと、ベックスニフは、「娘たちにジンキンズがいんぎんなれをつくしたがつているのは、彼の友好的感情のもう一つの証拠と思います (I take Jinkins's desire to pay polite attention to my daughters, as an additional proof of the friendly feeling of Jinkins)」と言った (ch. 9)。旅行かばんを持って家路に向かっていたベックスニフがジョーナスに、「私はいま君の亡くなったお父さんのことを考えていたのです」と言うのと、ジョーナスは自分のかばんを落とし、片手で相手をおどしてこう言う。

「そいつを落すんだ！」

ベックスニフはこのことばがさっきの話題のことか、旅行かばんのことかはっきりしなかった。

'To tell you the truth, Mr. Jonas,' said Pecksniff with great solemnity, 'my mind was running at that moment on our late dear friend, your departed father.'

Mr. Jonas immediately let his burden fall, and said, threatening him with his hand:

'Drop that, Pecksniff!'

Mr. Pecksniff not exactly knowing whether allusion was made to the subject or the portmanteau, stared at his friend in unaffected surprise. (ch. 20)

トジャーズ夫人が、「ジンキンズさんの (順序が分らないように) 輪形に署名した嘆願書 (round-robin) に色よい返事を出しましょうか？」とベックスニフに聞くと、彼は「どうしてジンキンズ君の駒鳥 (robin) ですか、奥さん？」と片腕を娘のマーシーに、もう一方の腕をトジャーズ夫人にまわして (putting one arm round Mercy, and the other round Mrs. Todgers)、尋ねた。彼は robin と、round-robin の省いた round をマーシーとトジャーズ夫人にまわし、穴埋めした。

'Are we ready,' returned Mrs. Todgers, nodding her head with mysterious intelligence, 'to send a favourable reply to Mr. Jinkins's round-robin? That's the first question, Mr. Pecksniff.'

'Why Mr. Jinkins's robin, my dear madam?' asked Mr. Pecksniff, putting one arm round Mercy, and the other round Mrs. Todgers: whom he seemed, in the abstraction of the moment, to mistake for Charity. 'Why Mr. Jinkins's?' (ch. 9)

ギャンプ夫人は立ち上がり (rose) —精神的にも肉体的にも立ち上がり (morally and physically rose) —ブリッグ夫人を非難した (ch. 49)。rose morally 「精神的に立ち上がった」は「激怒した」こと。彼は大変精を出して仕事にかかったので、海水が (浸水して) 船中で高くなるのと殆ど同じ早さで評価が上がった。

He (= Christian George King) went at it with so much heartiness, to say the truth, that he rose in my good opinion almost as fast as the water rose in the ship. ("The Perils of Certain English Prisoners," *Christmas Stories*)

動詞に異なった目的語をとらせ異なった意味で用いる語呂遊びがある。紳士方がご婦人方を連れてやってき (brought ladies up)、それから自分を紹介した (brought themselves up) (ch. 34)。自分の手違いで、エドワードに先

を越され、ミイ・フィールディングと結婚できなかったタクルトンは気のすすまない祝辞を述べ、詫びを入れて、難局を切り抜け (carried it off)、出て行った (carried himself off) (*The Cricket on the Hearth*, 3)。次例は第46章の小見出しで、to make に異質の名詞がきた場合である。ここでベックスニフ嬢は恋をし (makes love)、ジョーナス君は怒り (makes wrath)、ギャンプ夫人はお茶を出し (makes tea)、チャフィー氏は取り引きをする (makes business)。

動詞に異なった副詞または前置詞を付加させる。この間、クリベッジ (cribbage) は進行し (went on)、トジャーズ夫人は姿を消した (went off) (ch. 32)。ギャンプ夫人はお産 (a lying-in) にも入棺準備 (a lying-out) にも、同じように熱心に楽しく精を出した (ch. 19)。「私が大人になりかける (grew towards manhood) 時に、トムを知るようになったのです (grew into the knowledge of Tom)」とジョン・ウェストロックは言った (ch. 48)。

同一文脈で、ある語を他の品詞に置きかえたり、派生語を用いた語呂遊びがある。ナジットは秘密 (a secret) になるように生まれついていた。背が低く、乾ききって、しなびた老人で、血まで秘密にしたようだった (seemed to have secreted his very blood) (ch. 27)。私 [チャーリー] は彼 [エドウィン] の率直な顔がどのようにしてずうずうしく押し通せるだろうかといぶかりながら (wondering how his frank face could face it out so)、「君は私のために秘密を守ってくれたのかね？」と尋ねた (“The Holly-Tree,” *Christmas Stories*)。私は小さな部屋を頼んだが、なかった。しかし、宿屋の主人は部屋をついたてで仕切る (screen me in) ことが出来るだろうと言い、大きな古い日本のびょうぶ (a great old japanned screen) が持ち込まれた。

I asked for a smaller room, and they told me there was no smaller room. They could screen me in, however, the landlord said. They bought a great old japanned screen, with natives (Japanese, I suppose) engaged in a variety of idiotic pursuits all over it; and left me roasting whole before an immense

fire. (*Ibid*)

ジョン・ウェストロックは帽子をつかみ、実に忙しそうに (in his most energetically bustling way)、再び外にとび出した (bustled out) (ch. 45)。「私はドアの泥落とし (scraper) で靴の泥を落とし (scrape my shoes)、泥落としをベックニフと呼んでやりたい」とマークは言った (ch. 43)。トム・ピンチは特に旅まわりの刃物 (cutlery) に心を打たれ、それが実に切れると思ったので、7つ刃をおさめたポケットナイフを1つ買ったが、(あとになって分かったのだが) そこには1枚の刃 (cut) もはいていなかった (ch. 5)。鬼どもが急いで姿を消し、すぐに (presently) 火のような液体のはいた盃を持ってもどり、それを鬼の王様に差し上げた (presented) (*The Pickwick Papers*, 29)。ベイリーの話し方は、すでに脚を1本と4分の3幕の中に突っ込み、20年か30年も前に起きたかのような話しぶりだった。彼は小柄な少年だったが、老人のようにまばたき、ものを考え、行動し、老人のような物の言い方をした (winked the winks, and thought the thoughts, and did the deeds, and said the sayings of an ancient man)。内は年老いた原則がひそみ、外には若い表面が出ていた。彼はズボンと長靴をはいたスフィンクスだった (ch. 26)。

## 2

ピンチ (Pinch) 氏は同意し、ポンチ (punch) が注文された (ch. 5)。ルース・ピンチが肉汁 (gravy) を作るために水をそそぎ、自分のまじめさ (gravity) が乱されないように、彼のほうをこっそり見ようとはしない彼女の様子をながめることは、トム・ピンチにとってこの上ない喜びだった (ch. 39)。多くのチャズルウィットの者 (Chuzzlewits) は、男性であれ女性であれ、よく整った (chiselled) 鼻、歴然とわかる顎、彫刻家のモデルにもなれるくらいの姿、実に美しい手足、天上の地図に記された道路のように、静脈がさまざまな方向にわかれているのがはっきりわかる透きとおった肌を持つ、磨きあげられた額を持っていた。このような現象のそれぞれ、特にいかさま (chiselling)

は、最高の状態にある者に特有のもので、こういう人たちにはっきり現われている (ch. 1)。ギャンプ夫人は片目は将来に、もう一方の目は花嫁にすえ、一部は宗教的 (spiritual)、一部はアルコールを含んだ (spirituous) いたずらっぽい表情を顔に浮かべていた。

With a leer of mingled sweetness and slyness; with one eye on the future, one on the bride, and an arch expression in her face, partly spiritual, partly spirituous, and wholly professional and peculiar to her art; Mrs. Gamp rummaged in her pocket again, and took from it a printed card, whereon was an inscription copied from her sign-board. (ch. 26)

彼女らの知識は、目新しいものは少しもないようだったが、広範囲にわたっていた。形而上学、水圧力、人類の権利にすぐれた才能をもつ長女は特にそうで、こうした才能を結びつけ、婦人帽子業 (Millinery) から至福千年 (キリストが君臨してこの世を統治するという千年間) (Millennium) に至るまで、その双方をふくめたすべての問題にその才能を集中させる斬新な方法を心得ていた (ch. 17)。ペックスニフが主人を失って気落ちしているチャフィー老事務員に、「元気を出さすんですよ (Summon up your fortitude)」と言うと、チャフィーは、「40を計算しますよ (I'll sum up my forty) —40を何倍 (How many times forty) —…」と答えた (ch. 19)。

類音によるうろ覚えや聞きちがいによって生じる笑いがある。ギャンプ夫人もシェリダンの喜劇 *The Rivals* (1775) に登場する言葉の滑稽な誤用で有名なマラプロップ夫人に負けていない。彼女は印 (marks) を仮面 (mask) (ch. 49)、モルタル (mortar) をモットー (motto) (*Ibid.*)、ごたまぜの (promiscuous) を卓越した (prominent) (in this promiscuous place) (ch. 46) と混同する。ギャンプ夫人のうろ覚えをよく知っている同僚のプリック夫人は Chuffey 老人を Snuffey (i. e. Snuffy) 老人 (かぎたばこ老人) と意識的に言いちがえて、話題に出す (ch. 49)。「さあ、しばらく、私の言うことをよく聞くんた、Mr. Pitch (ピッチ、タール)、

Witch (魔女)、Stitch (切れはし)、名前はとうだっっていが」とジョーナスはピンチ (Pinch) に向かって言った (ch. 24)。トジャーズ夫人は金持ちの令嬢を前にして、「これまで天使のおもかげをこのかたの4分の1でも持っている娘に会ったことは絶対にない。もし、一対の翼さえあれば若いシロップ (syrup) になれたのに」と言った。シロップは多分、シルフ [空気の精] (sylph) かセラフ [熾天使 (最高位の天使)] (seraph) のことだろう (ch. 9)。ペックスニフは a one-eyed almanack (ひとつ目の暦) を a one-eyed calender (ひとつ目の托鉢僧) と間違えて用いる (ch. 6)。「会社の話題 (toepics) について私見をはさむことは会社に雇われた者としては出来ない相談です」とランプスは話題 (toepics) を妻揚子 (toothpicks) のように発音した (“Mugby Junction,” I (1), CS)。類音からはずれるが、マーティンは人名のウェストロック (Westlock) (西の錠) をノースキー (Northkey) (北の鍵) と勘ちがいでいる。彼は Northkey を磁石 (compass) のある方向と戸 (door) に関連づけていたのである (ch. 12)。

マーク・タプリーは得意満面で杯をマーティンから受けとりながら言った。「もしまたヘトヘトになるようなことがあり、私がそこに居合わせなかったら、そちらのしなければならぬことは、ただ最寄りの人にコブラー (cobbler) を持ってきてもらうことです」「コブラーだって?」とマーティンはおうむがえしに言った (ch. 17)。コブラーはぶどう酒・果物・砂糖などで作る氷入り飲物 [カクテルの一種] であるが、「靴直し」の意味もある。「もうくたくただわ、本当に! 車がゆれがひどく、レールが倒木や流木 (snags and sawyers) で一杯のようだわ」とアメリカのホミニー夫人が言うとき、マーティンは、「倒木や木びきですって?」と聞き返す (ch. 22)。sawyer は ((米語)) で「流木」の意味がある。ギャンプ夫人の用いた「愛の翼 (the Wings of Love)」を耳にして、競馬に興味のあるベイリーは、「それは競馬の金賞杯 (a plate) を獲得したことがありますか?」と聞く (ch. 26)。チャリテイ (Charity)! チャリテイ! 真情あふれる調子で彼女の妹が訴え

たので、姉の名が持っているあの基本道徳を示してほしいと姉に乞い求めているかのようだった。

'Charity! Charity!' remonstrated her sister, in such a heart-felt tone that she might have been imploring her to show the cardinal virtue whose name she bore. (ch. 46)

頭韻、脚韻による笑いもある。ロンドン大火記念碑の男 (the Man in the Monument) は、トムにとって、月の男 (the Man in the Moon) と同じように、神秘的な存在であった (ch. 37)。トムは老紳士を一瞥したが、老人はベックスニフのことば (sentences) と考え (sentiments) に賛成といったふうには、時々うなづいた (ch. 31)。ベックスニフはメアリー・グレアムの魅力の力をいつも感じていた。そこで (彼女との結婚の) 利益 (Interest) と好み (Inclination) が1組になり、ベックスニフの計画の馬車を引いた (ch. 30)。ベックスニフは陽気な冷かしといったふうには右手の人差し指をふって、ジョーナスに言った。「いま新聞で読んでおられたのは詩 (poetry)、政治 (politics)? それとも株価 (price of stock)?」 (ch. 18)。モッドルはベックスニフ嬢 (チャリティ) に、うちしおれた心 (a blighted heart) (i.e. Moddle) に満足できますか、と尋ね、彼女が満足できそうだったので、彼は陰気な婚約をした (plighted his dismal troth) (ch. 32)。

### 3

縁語は修辞法のひとつで、ある語と意味上の関連を持ち合った用語で、くだけた文脈で用いられる。「文書 (documents) を持って行かねばなりません。というのは、彼 (ベックスニフ) はしたたか者 (a deep file to deal with) だから」とジョーナスは叫んだ (ch. 41)。file は ((英俗)) で「抜け目のない者」だが、「(書類の) ファイル」、「(書類をとじる) とじ紐」の意味があり、文書 (documents) と縁語になる。前の章 (chapter) の最後のことばは、当然、それに続くこの章のはじまりにつながる。それは教会 (church) に関係があったからである (ch. 31)。chapter は「牧師団 (修道会) 会議」の意味がある。ジョーナスは前にほめられたあの深遠さ

と鋭さ (sharpness) を主張する以外に、ほかの者と対等に太刀打ちできる手段はないと思ったので、その能力を最大限に発揮して、とても深遠に、鋭く (sharp) なっていたので、自分の深遠さの中で道に迷い、自分の刃物 (edge-tools) で指を切った (ch. 28)。「すべてが! すべてが彼女にとって音楽です」とランプス [点燈係] (Lamps) は明るく (radiantly) 叫んだ ("Mugby Junction" I (3), *Christmas Stories*)。「2ペニー上げたらどうする?」のバーボックス・ブラザーズの問いに、子供は「使っちゃうよ」と即答したので、バーボックスは動転し、立つ瀬 (a leg to stand upon) がなくなったので、大変躊躇しながら (with great lameness)、2ペニーを取り出した。

'What would you do with twopence, if I gave it you?'

'Pend (= Spend) it.'

The knock-down promptitude of this reply leaving him not a leg to stand upon, Barbox Brothers produced the twopence with great lameness, and withdrew in a state of humiliation. (*Id.*, I (2))

そこに居合わせた連中は、となりの通りの居酒屋 (bar-room) にブラブラ歩いて行った (lounged out) (ch. 16)。lounge は名詞で「カクテルラウンジ」の意味がある。次例は「出かける」(go) と「許可」(leave) が縁語になる。

'Thank you,' said Mr. Pecksniff, 'I am aware of that; I am going. But before I go, I crave your leave to speak, ...' (ch. 3)

「ティッグ、君に証人になってもらいたい、俺はこの地上で一番迫害を受けている犬 (hound) だ」とスライムはいま述べた動物と似ないわけでない哀れっぽい鼻声 (whine) で言い、コップを口に持っていった (ch. 7)。質屋の店員はティッグが買入した品 (シャツらしかった) を巻きながら、「あなたが持ってくるのは、いつももみがら [がらくた] (chaff) ばかりだ」とこぼすと、ティッグは、「質屋通いをするかぎりは、小麦 (wheat) で一杯になることは決してない」と返す (ch. 13)。「シェクスピアの韻文には足 [韻脚、詩脚] (feet) がたくさんあるが、シェクスピアの劇には語るに

足る脚 (legs) はない。ジュリエット、デズデモナ、マクベス夫人、その他の人物は脚がないのも同然だ (スカートがながいため)」と子爵が言った (ch. 28)。

separate the wheat from the chaff 「いい物を選び分ける」という言い回しがある。丸ぼちゃの青竜旅館の女主人は未亡人だったが、何年も前に喪服の状態 (her state of weeds) が終わり、再び開花した (burst into flower)。それ以来ずっと満開で、今も満開だ。ゆったりしたスカートにバラ、胴着にバラ、帽子にバラ、頬にバラ [顔がバラ色] をつけ、唇にも摘みとる価値のあるバラをつけていた。雑草 (weeds) と花 (flower) が縁語になっている。

The mistress of the Blue Dragon (i.e. Mrs. Lupin) was in outward appearance just what a landlady should be: broad, buxom, comfortable, and good-looking, with a face of clear red and white, which, by its jovial aspect, at once bore testimony to her hearty participation in the good things of the larder and cellar, and to their thriving and healthful influences. She was a widow, but years ago had passed through her state of weeds, and burst into flower again; and in full bloom she had continued ever since; and in full bloom she was now; with roses on her ample skirts, and roses on her bodice, roses in her cap, roses in her cheeks, — aye, and roses, worth the gathering too, on her lips, for that matter. She had still a bright black eye, and jet black hair; was comely, dimpled, plump, and tight as a gooseberry; and though she was not exactly what the world calls young, you may make an affidavit, on trust, before any mayor or magistrate in Christendom, that there are a great many young ladies in the world (blessings on them, one and all!) whom you wouldn't like half as well, or admire half as much, as the beaming hostess of the Blue Dragon. (ch. 3)

## 4

もじりはもとの表現をかえて滑稽にしたもの

であるが、ことばを玩具にして遊ぶディケンズが好んで用いる手法である。Yours は手紙の結びの文句に用いて、「草々」、「敬具」であるが、オーガスタスのベックスニフ嬢 (チャリティ) 宛の手紙の結びは、'Unalterably, never yours, 'Augustus'. 「けっして君のものとはならない。オーガスタス」であった (ch. 54)。旅人に町の宿屋を問われた召使のランプスは、「あるにはあるがこんな真夜中 (a very dead time of the night) に」と言う。彼はこれをさらに 'deadest and buriedest time' 「死んで埋葬するのに一番ふさわしい時刻」と強調する。

'Oh yes, there's a town, Sir! Anyways, there's town enough to put up in. But,' following the glance of the other at his luggage, 'this is a very dead time of the night with us, Sir. The deadest time. I might a'most call it our deadest and buriedest time.' ("Mugby Junction," I (1), *Christmas Stories*)

御者のシモンズ・ビルは、渡米した知人のネッドがニューヨーク (New York) はあらゆる点でオールドヨーク (Old York) と異なる、と手紙に書いてよこした、と言う (ch. 13)。ヨークはイギリス北東部のヨークシャーの首都で、オールドはニューヨークのニューに対しておどけて用いられた。アメリカ合衆国では、鋼鉄、鉄は血肉より重要視される。あの感覚のない金属のかたまりを勝手に汚損すると、20人の命を奪ったよりも多くの罰と罰金を課せられる。こうして星 (stars) は血だらけの鞭打ちの跡 (stripes) を見て見ぬふりをする。the Stars and Stripes は「星条旗」である。

Thus the stars wink upon the bloody stripes; and Liberty pulls down her cap upon her eyes, and owns Oppression in its vilest aspect, for her sister. (ch. 21)

どうしても (For the life and soul of him)、トムは「35歳の立派な青年」以上に書き進めることができなかった (ch. 39)。for the life of one の強意形である。彼ら4人はエデン開拓地事務所に向けて出発したが、それはナショナル・ホテルのほんのすぐそばに (within rifle-shot of the National Hotel) あった (ch. 21)。within a stone's throw of 「…から石を投げて

届く距離に」という言い回しがある。彼らがすぐ笑い終るということはなかった。というのは、ジョンは快活で上機嫌な男だったので、一寸を与えれば数尺を望んだからである (give John an inch and he was sure to take several ells) (ch. 39)。Give him an inch and he'll take an ell。「寸を与えれば尺を望む」の諺のもじりである。「歲月人を待たず」(Time and tide wait for no man.) という諺がある。しかし人は時と潮を待たねばならない。ペックスニフは流れ (stream) の変化に心を配り、水べりで、靴の上まで水につかって、流れが希望の場所に運んでくれるように、泥沼の中でころがり回る。

Time and tide will wait for no man, saith the adage. But all men have to wait for time and tide. That tide which, taken at the flood, would lead Seth Pecksniff on to fortune, was marked down in the table, and about to flow. No idle Pecksniff lingered far inland, unmindful of the changes of the stream; but there, upon the water's edge, over his shoes already, stood the worthy creature, prepared to wallow in the very mud, so that it slid towards the quarter of his hope. (ch. 10)

ありきたりのことばを使って、この瞬間のペックスニフの様子は、口の中でバターが「融けようとはしないようだった [虫も殺さないような顔をしていた] (looked as if butter wouldn't melt in his mouth) と言ったら、それは彼のやさしい物腰の描写にはならないだろう。人間の親切というミルクが彼の心から噴き上げてくる時、そのミルクをかきまぜて、いくらでもバターが彼から作り出せるような顔をしていた。

It would be no description of Mr. Pecksniff's gentleness of manner to adopt the common parlance, and say that he looked at this moment as if butter wouldn't melt in his mouth. He rather looked as if any quantity of butter might have been made out of him, by churning the milk of human kindness, as it spouted upwards from his heart. (ch. 3)

'dot and carry one' (足し算で10になると)

点を打って位を1桁送る」という言い回しがある。運送屋のペリービングルは妻に Dot (ちび) という渾名をつけているが、彼女に、'A dot and' と言ってから彼女の抱いている赤ん坊に目をやり、'a dot and carry' でことばを切ってしゃれてみせる。carry の後には a [her] baby が予想され、「ちびが (赤ん坊を) 抱いている」となる (*The Cricket on the Hearth*, 1)。

## 5

慣用表現を文字通りにとることばの遊びがある。はうようにしてやってきて、戸口からのぞき込んだ男に、チョロップは、「調子はどうかね?」('How do you git along?') と聞く。彼はやってくる (get along) のに大変骨を折ったので、大変だったと答えた。

The man who had met them on the night of their arrival came crawling up at this juncture, and looked in at the door.

'Well, sir,' said Chollop. 'How do you (原文、イタリック) git along?'

He had considerable difficulty in getting along at all, and said as much in reply. (ch. 33)

モンタギューが、「家に客を招く時はふだんのままの (in the rough) 我々の姿をみせることにする」と言うと、ジョーナスは、「かなりなめらか (smooth) でもありますよ」とテーブルをチラリと見返し、「この費用はバカにはなりませんからね」と言う (ch. 28)。in the rough は「準備 [用意] もなく」の意の慣用句であるが、ジョーナスは rough 「粗野な」の反意語である smooth 「なめらかな」でうけた。smooth は文脈で、「(ごちそうの) 準備 [用意] をしている」の意味になる。クリベッジ (cribbage) の第7夜に、トジャーズ夫人はモッドルとチャリティに賭けはやめにして、ただで (for 'love') やったら、と提案すると、モッドルは顔色を変えた (ch. 32)。彼は for love を文字通り、「愛のために」ととったのである。

On the seventh night of cribbage, when Mrs. Todgers, sitting by, proposed that instead of gambling they should play for 'love,' Mr. Moddle was seen to change colour. On



the fourteenth night, he kissed Miss Pecksniff's snuffers, in the passage, when she went up-stairs to bed: meaning to have kissed her hand, but missing it. (ch. 32)

慣用句と文字通りの普通の言い方の組み合わせがある。ホミニー夫人は、諺にあるように、本のように正確に話した (talked like a book) ばかりでなく、逐語的に自分自身の著わした本を述べた (did talk her own books) (ch. 34)。おいとまするマーティン老人を姪のチャリティとマーシーは心をこめて (with all their hearts) 一とにかく、両腕に力をこめて (with all their arms)、抱擁した (ch. 10)。ペーリピングル夫人はやかんを火にかける時、一瞬、心の平静を失った [かんしゃくを起こした] (lost her temper) か、置き違えるかした (misaid it) (*The Cricket on the Hearth*, 1)。メイの母親は自分の生まれのよさを自慢した (stood on her gentility) が、ちびの母親は自分のこまめに動く小さな足でしか立つことは出来なかった (never stood on anything but her active little feet)。

Then, Dot's mother had to renew her acquaintance with May's mother; and May's mother always stood on her gentility; and Dot's mother never stood on anything but her active little feet. (*Id.*, 3)

## 6

もってまわった仰々しい表現は、ディケンズの英語の特徴であり魅力である。単刀直入の言い方をさけた迂言的表現は思考に抵抗を与え、解説の喜びがある。帽子をかぶり、ゆり椅子で身体をゆすっていた大柄な紳士 [ポーキンズ少佐] は、ストーブの右側と左側のたんつばに交互につばをはいて楽しみ、同じ順序でこれをくり返した。つばはきという知的楽しみに熱中していた少佐は左手のたんつばを応援しようとそれに貧者の一燈を献じた (contributed his mite towards the support of the left-hand spittoon) (ch. 16)。夏の土用 (7月3日から8月11日) には、軽い荷物の運搬人は主人の建物の前の舗道に奇妙な模様の水まきをやった [裸で汗を流し舗道をぬらした] (watered the

pavement in fantastic patterns) (ch. 11)。3人の老嬢は堅く結んだコルセットできつくしめあげられていたので、気質は腰より細くなり [短気になり]、くっきりしたコルセットの締めひもが鼻にまで示されていた [鼻にしわができていた]。

Beside her sat her spinster daughters, three in number, and of gentlemanly deportment, who had so mortified themselves with tight stays, that their tempers were reduced to something less than their waists, and sharp lacing was expressed in their very noses. (ch. 4)

ベックスニフの傷はたいしたものではなかった。あっても骨相学者の知らない後頭部のまったく新しい器官の隆起 [こぶ] (the development of an entirely new organ) に限られていた (ch. 2)。ベックスニフは、「我々は母親の腕 (The Mother's Arms) から出発し、土をすくい上げるシャベル [死] に走っていく」と言う (ch. 8)。【聖】*Gen.* 3:19 に、Dust thou art, and unto dust shalt thou return. (汝はちりなればちりに帰るべきなり) がある。ルース・ピンチはジョン・ウェストロックの誓言に小さなばら色の封印をおし [キスをし] (set a little rosy seal upon the vow)、そのばら色は、彼女の顔に反映し、編んだ黒みがかった褐色の髪のところまで広がった (ch. 53)。ルーピン夫人は女性の先祖から継承しているあの好奇心という大きな元金 [財産] の分け前と配当金 (share and dividend of that large capital of curiosity) を十分持っていた (ch. 3)。建築家のベックスニフはマーティン老人のことばにすっかり心を打たれて、口もきけなくなった。彼は自分の庇護者の手に涙を一滴落とそうとしたが、乾きあがった蒸留酒 (涙) 製造場 [目] (distillery) にそれを見つけることができなかった (ch. 30)。ギャンプ夫人は馬車に同乗のベックスニフ氏の2本の脚を相手にパットン (patterns) で数多くの輪投げ遊びをやった [ベックスニフ氏の脚に木靴で輪型をつけた] (with which she played innumerable games at quoits on Mr. Pecksniff's legs) (ch. 19)。パットンは泥道を歩く時など靴につけて用いる

履き物で、普通は木底の下に五徳のような形をした鉄製の輪がついている。チョロップの顔は彼が手にしている杖と同じように節くれ立ち、手もそうだった。顔は古くて黒い炉のほうきだった。彼はやってきながら、タバコをすい、かみたばこをかみ、頻繁につばをはき、地面にひとつづきのかみすてたタバコで、自分の進行を記録した (recorded his progress)。彼は工場の煙突のように、タバコの煙をさかんに吐きつづける (ch. 33)。馬車に乗り込んだギャンプ夫人は、円いつぎはぎのついた傘のための避難の港 (a haven of refuge) を見つけようとやっきになって、5分の間にそれを何回となくあちこち動かしたので、傘が1本ではなく50本に見えた (ch. 29)。ブリッグ夫人が寝台にぶつかり、リンゴの山がくずれ、そのうちの3つか4つがギャンプ夫人の頭に強く当たり、この木のシャワー (this wooden showerbath) から回復した時には、ブリッグ夫人の姿は消えていた (ch. 49)。イーソー・スロッジの「船長」はマーティンとマークが素早く歩み板から離れなかったら、2人を酒の中にこぼしてやる (spill 'em in the drink)、と叫ぶ。これは、2人を川に放り出す、ということを比喩的に言ったものである (ch. 33)。ポリーはお茶のあと、目をこすりながら、バーボックス・ブラザーズに、「誰がやってくると思う?」と尋ねる。彼が「召使かな?」と言うと、彼は dustman と答える。dustman [sandman] は目の中に砂を入れて子供たちを眠くするという民話・おとぎ話に出てくる人物である。The sandman has come, 「眠くなった」、The dustman's coming. 「もうおねむだね」という言い回しがある。

'I say! Who do you think is coming?' asked Polly, rubbing her eyes after tea.

He guessed: 'The waiter?'

'No,' said Polly, 'the dustman. I am getting sleepy.' ("Mugby Junction," II, *Christmas Stories*)

to dine with Duke Humphrey (= to go dinnerless) 「ハンフリー公爵と晩餐をとる [食事なしにすます]」という滑稽な成句がある。チャズルウィット家の一員がお偉方と懇意にしていた例は全く見当たらないと言われている。し

かし悪意のこもった頭からこのような作り話をでっち上げる冷笑的な誹謗者は証拠をつきつけられて啞然となる。というのは、この家のさまざまな分家には手紙類がまだ残っていて、ディッゴリー・チャズルウィットという男がいつもハンフリー公爵と晩餐をとっていたことが明記してあったからである。彼はたえずその貴人の食卓で客人となり、公爵の歓待と交際が絶え間なく彼に押しつけられていたからである。

It has been said that there is no instance, in modern times, of a Chuzzlewit having been found on terms of intimacy with the Great. But here again the sneering detractors who weave such miserable figments from their malicious brains, are stricken dumb by evidence. For letters are yet in the possession of various branches of the family, from which it distinctly appears, being stated in so many words, that one Diggory Chuzzlewit was in the habit of perpetually dining with Duke Humphrey. So constantly was he a guest at that nobleman's table, indeed; and so unceasingly were His Grace's hospitality and companionship forced, as it were, upon him; that we find him uneasy, and full of constraint and reluctance: writing his friends to the effect that if they fail to do so and so by bearer, he will have no choice but to dine again with Duke Humphrey: and expressing himself in a very marked and extraordinary manner as one surfeited of High Life and Gracious Company. (ch. 1)

#### 主要参考文献

- Apte, M.L. *Humor and Laughter*. Cornell University Press. 1985.
- Brook, G.L. *The Language of Dickens*. Andre Deutsch. 1970.
- Kincaid, J.R. *Dickens and the Rhetoric of Laughter*. O.U.P. 1971.
- Nash, W. *The Language of Humour*. Longman. 1985.
- Quirk, R. *The Linguist and the English Language*. Arnold. 1974.
- Yamamoto, T. *Growth and System of the Language of Dickens*. Kansaidaijaku. 1950.